

12 経年比較にみる高校生の生活と意識

この章では、高校生の生活と意識について経年的な変化をみる。本調査以外の過去の調査はすべて、財団法人日本青少年研究所が実施したものである。

1) 将来、受きたい教育の水準

図12-1は、「四年制大学まで」、「大学院まで」（「修士」＋「博士」）、「学歴にこだわらない」「まだ考えていない」という回答の割合を、普通科高校生の経年比較で示したものである。これを見ると、「四年制大学まで」の割合が、日本の普通科高校生は、2005年53.0%、2011年63.4%、2014年67.3%と、年々高くなっている。米国、中国も高くなっている。一方、「大学院まで」（修士と博士の合計）という回答は、日米中韓4か国とも少なくなっている。また、米国は、「学歴にこだわらない」と回答した者の割合が大幅に増加している。

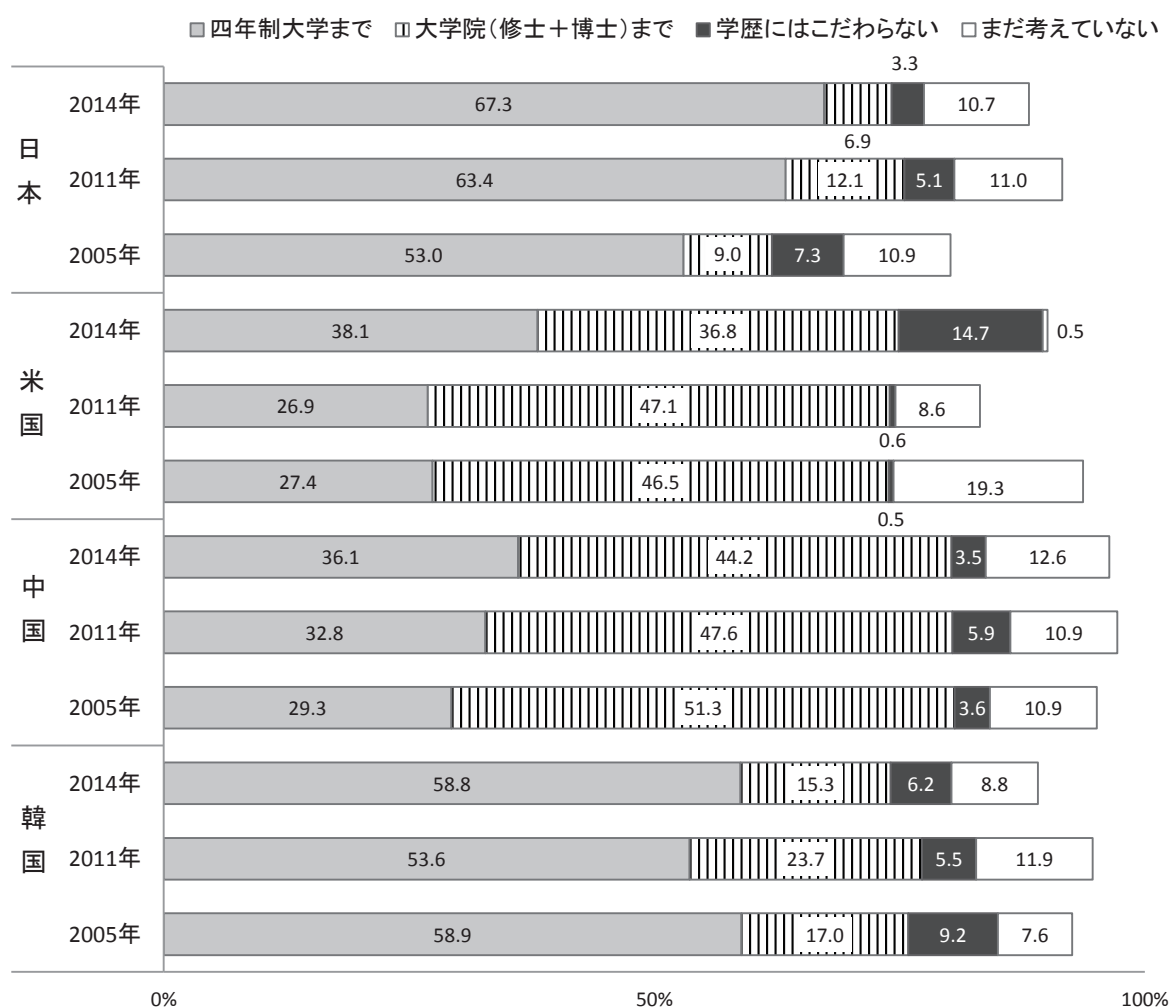


図12-1 将来、どのような教育を受けたいか(普通科高校生の経年比較)

☆2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」、2005年:「高校生の友人関係と生活意識に関する調査」

2) 親子関係

「家族との生活に満足している」について、2005年と2011年の調査と比較した。図12-2に示しているように、「とてもそう思う」の割合は、4か国とも増加傾向が見られた。

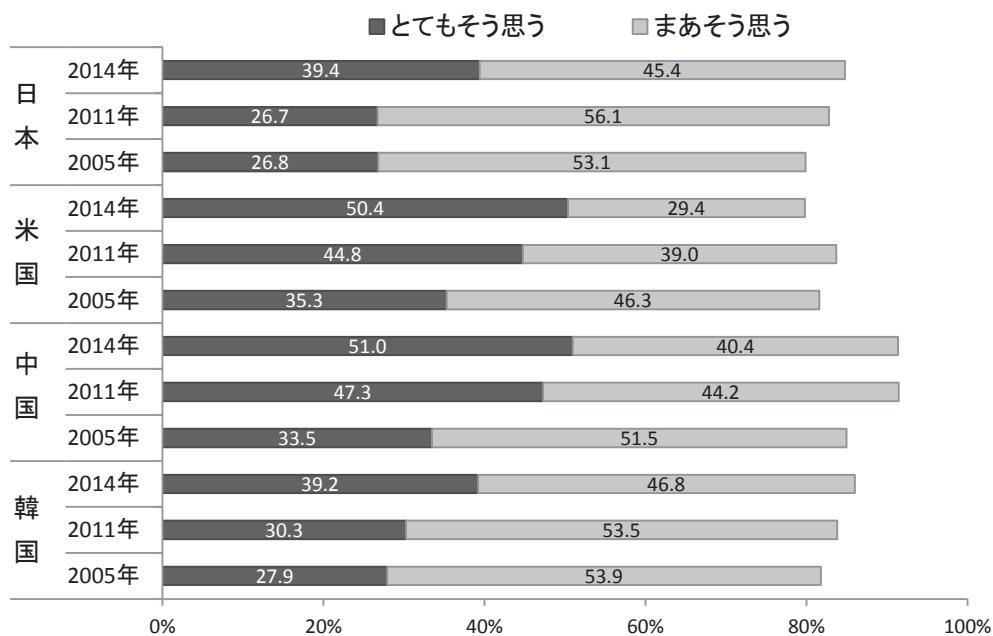


図12-2 家族との生活に満足している
(2005年、2011年:「家庭生活に満足している」)

* 2005年:「高校生の友人関係と生活意識に関する調査」、2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」

図12-3は、「親(保護者)を尊敬しているか」の6年間の変化を示したものである。これを見ると、「とてもそう思う」の割合が、日本、米国、韓国は増加している。特に日本と韓国の伸びが著しい。中国はほとんど変化がなく、高い肯定率を保っている。

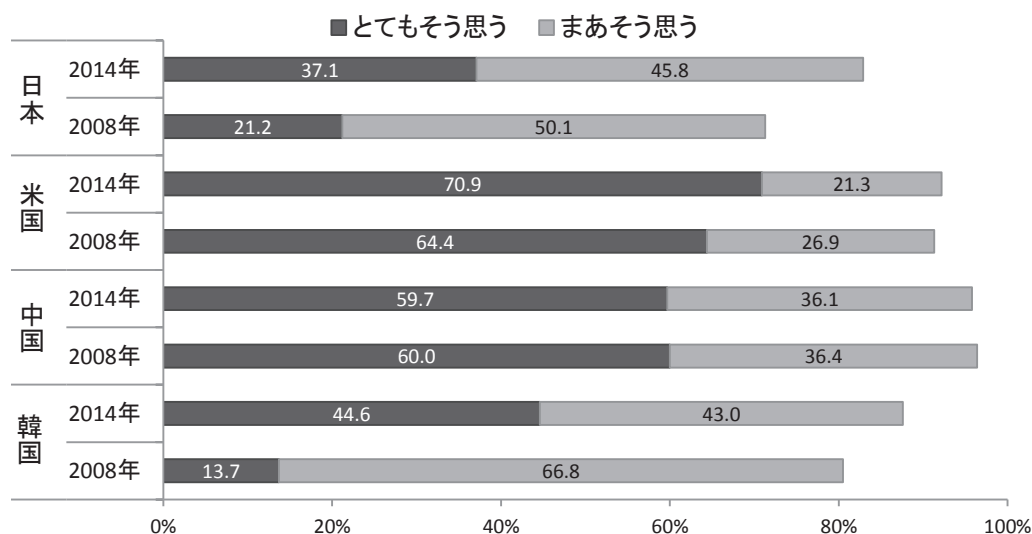


図12-3 親(保護者)を尊敬している

* 2008年:「中学生・高校生の生活と意識」

また、「どんなことをしてでも自分で親の世話をしたい」の回答を10年前と比較してみると、図12-4のとおり、日本と米国は減少しているのに対し、中国は高い水準を保っている。

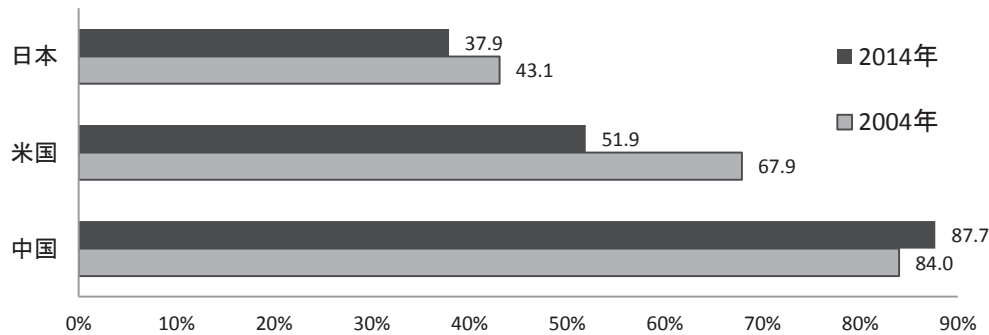


図12-4 どんなことをしてでも自分で親の世話をしたい
* 2004年:「高校生の学習意識と日常生活一日米中3か国比較」

3) 人生目標

図12-5は、「高い社会的地位につくこと」について、「とてもそう思う」と回答した割合を2006年、2011年及び今回の2014年で比較したものである。図示したとおり、日米中韓4か国とも減少していることがわかる。日本は2006年の14.1%から2011年の20.0%とやや増加したが、今回は8年前よりも低くなっている。一方、米中韓3か国の減少が顕著である。米国と中国は8年前より10ポイント以上も減少し、韓国も3年前より大きく減少している。

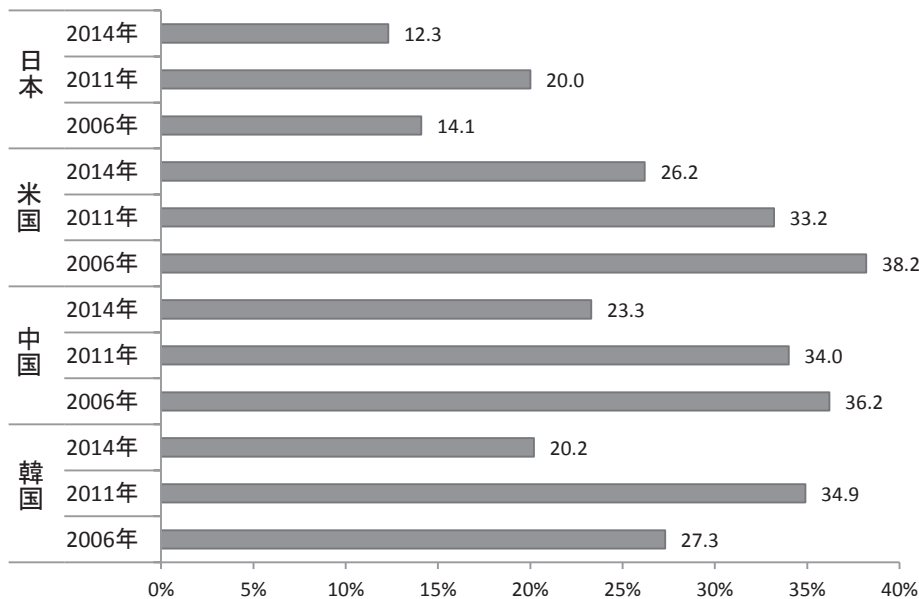


図12-5 高い社会的地位につくこと(「とてもそう思う」と回答した者の割合)

* 2006年:「高校生の意欲に関する調査」、2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」。以下同様。

図 12-6 は、「お金持ちになること」について、「とてもそう思う」という割合を示したものである。日本は、2006年と2011年では3割強の割合が、2014年で2割へ減少している。中国は前回の調査より大きく減少している。韓国は3年前より15ポイント減少している。米国は2006年と2014年では、いずれも5割強の肯定率となっている。

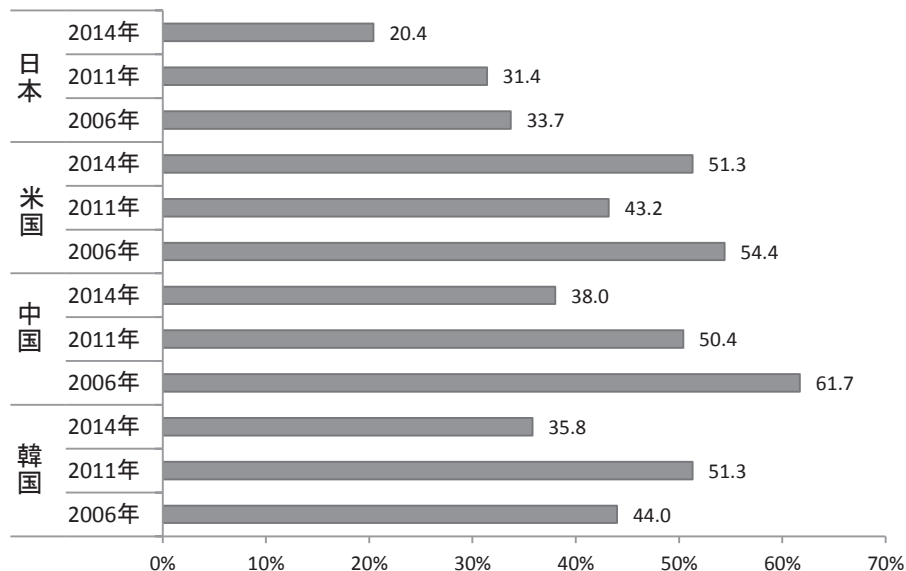


図12-6 お金持ちになること(「とてもそう思う」と回答した者の割合)

「円満な家庭を築くこと」については、「とてもそう思う」と回答した割合が、日本は2006年67.1%、2011年64.3%、2014年59.6%と、年々低くなっている。米国と中国も似た傾向を示している。韓国は2011年で5年前より伸びていたが、今回は3年前よりやや減少している(図12-7)。

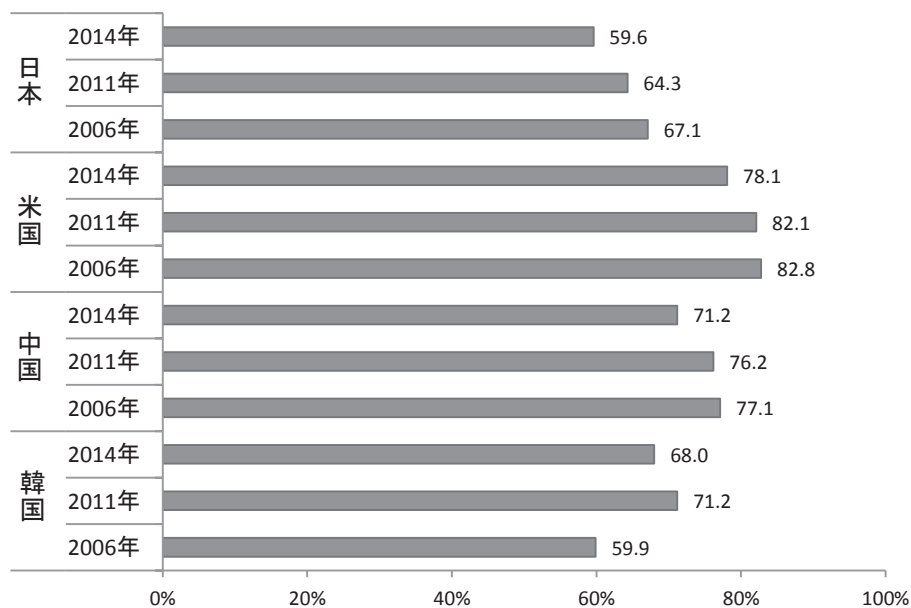


図12-7 円満な家族を築くこと(「とてもそう思う」と回答した者の割合)

「自分の趣味を生かす暮らしをすること」について、3年前と比較した。「とてもそう思う」と回答した割合は、日中韓3か国とも減少傾向を示しているのに対し、米国はやや増加している（図12-8）。

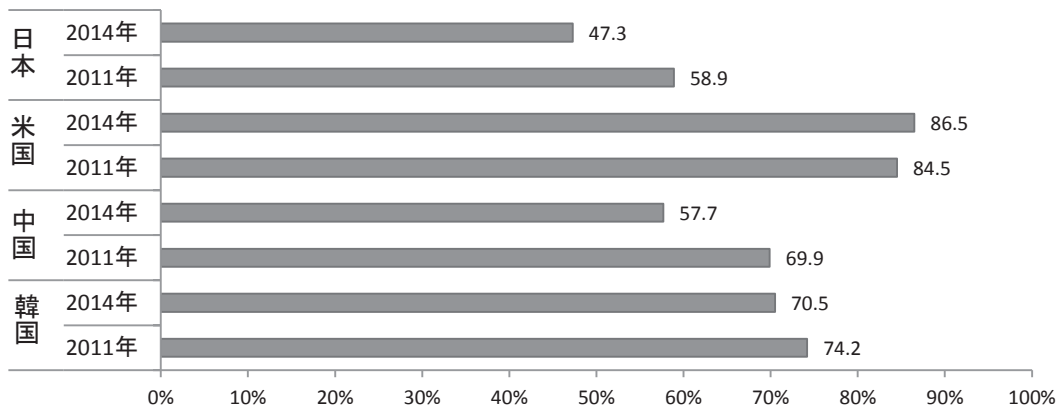


図12-8 自分の趣味を生かす暮らしをすること(「とてもそう思う」と回答した者の割合)

「のんびりと気楽に暮らすこと」については、「とてもそう思う」と回答した割合が、日米中韓4か国とも3年前より低くなっている（図12-9）。

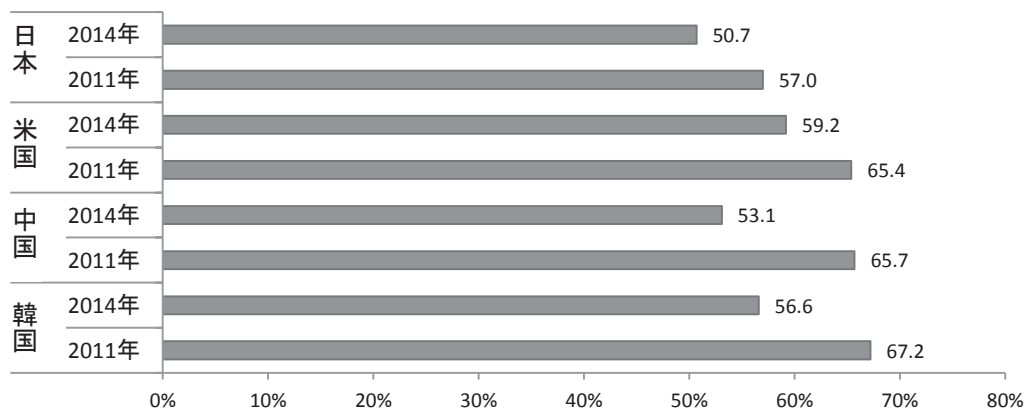


図12-9 のんびりと気楽に暮らすこと(「とてもそう思う」と回答した者の割合)

「社会のために役立つ生き方をすること」については、「とてもそう思う」と回答した者の割合が、日本と韓国では、3年前より1割弱増加している。米国もやや高くなっている。反対に、中国は大きく減少している（図12-10）。

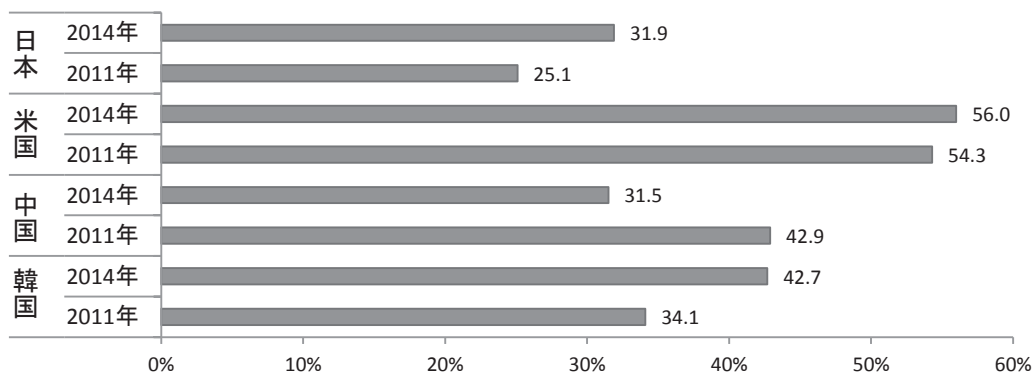


図12-10 社会のために役立つ生き方をすること(「とてもそう思う」と回答した者の割合)

「たくさんの友達をもつこと」については、図 12-11 のとおり、「とてもそう思う」と回答した者の割合が、日米中韓 4 か国とも大きく減少している。

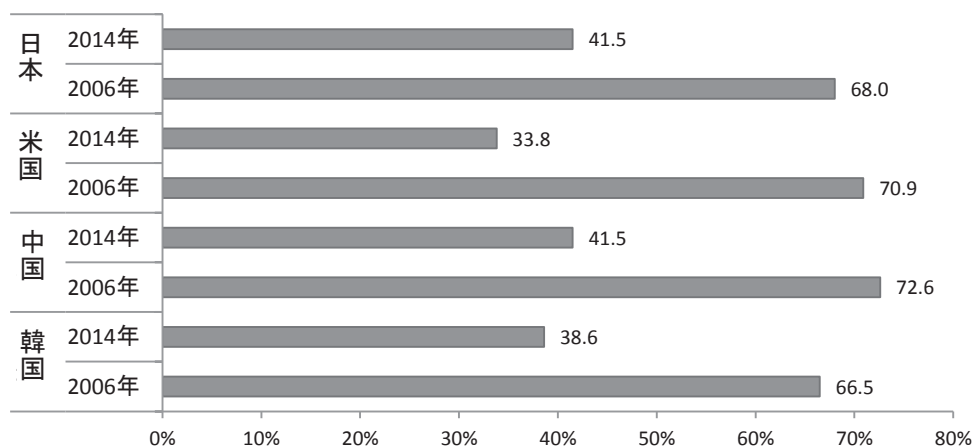


図12-11 たくさんの友達をもつこと(「とてもそう思う」と回答した者の割合)

以上のように、2006 年以來の調査と比較してみると、日本では、「社会のために役立つ生き方をする」という目標が増えているが、「高い社会的地位につく」「お金持ちになる」「円満な家庭を築く」「自分の趣味を生かす暮らしをする」「のんびりと気楽に暮らす」「たくさんの友達をもつ」といった項目が減少の傾向にある。韓国も同じ傾向が見られた。

米国では「社会のために役立つ生き方をする」のほかに、「お金持ちになる」「自分の趣味を生かす暮らしをする」も増加傾向にある。中国では、「社会のために役立つ生き方をする」「高い社会的地位につく」「お金持ちになる」「円満な家庭を築く」「自分の趣味を生かす暮らしをする」「のんびりと気楽に暮らす」「たくさんの友達をもつ」といった項目がすべて減少の傾向にある。

4) 国への意識

図 12-12 は、「自国で暮らすことに満足している」への回答を示したものである。3 年前に比べて、日本と中国の肯定率が伸びていることに対し、米国と韓国の高校生の満足感は、低くなっていることがわかる。

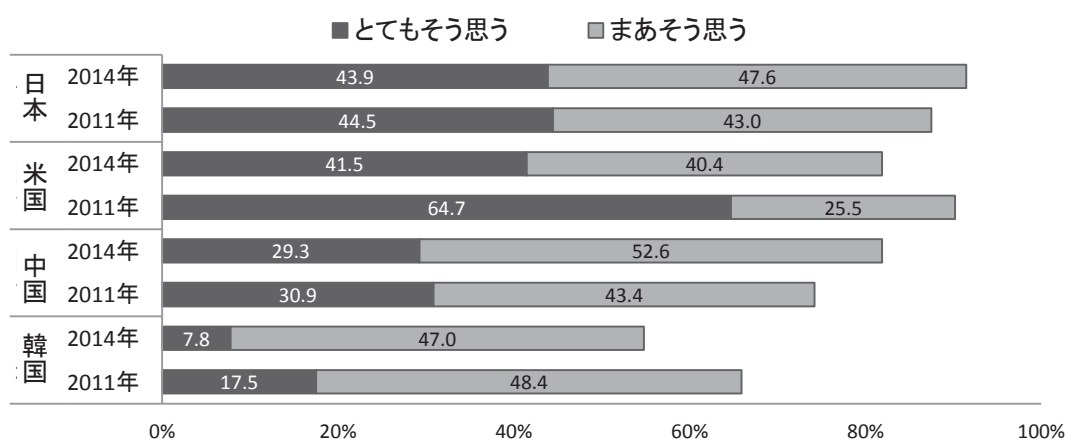


図12-12 自国で暮らすことに満足している

* 2011 年：「高校生の生活意識と留学に関する調査」。以下同様。

「外国の生活に憧れている」については、「とてもそう思う」と回答した割合が、3年前に比べて、日本と中国は低くなっている。「まあそう思う」を合わせると、米国と韓国は増加している（図12-13）。

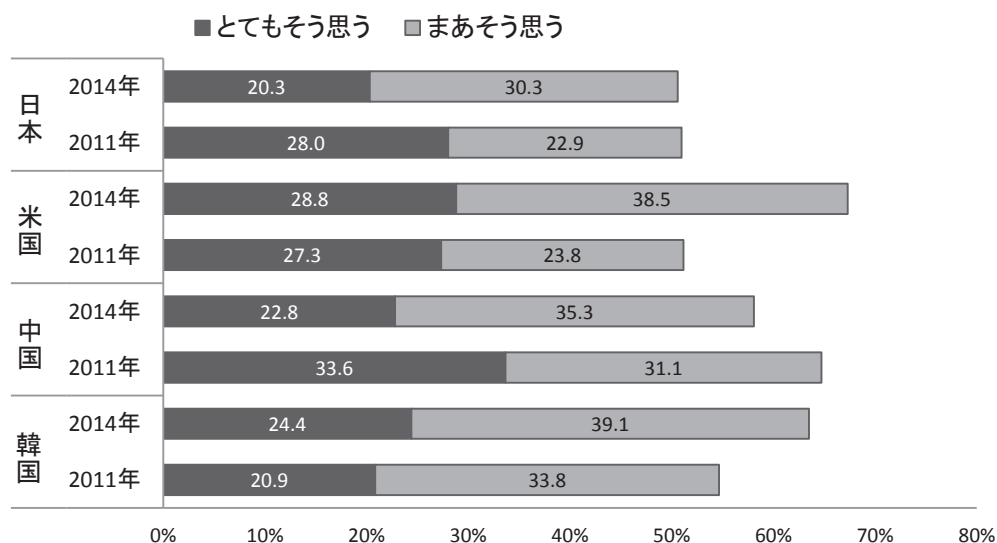


図12-13 外国の生活に憧れている

「国の発展は自分の発展につながっている」については、「とてもそう思う」と「まあそう思う」と回答した合計が、日本は高くなり、韓国は低くなっている。米国と中国は大きな変化がみられなかった（図12-14）。

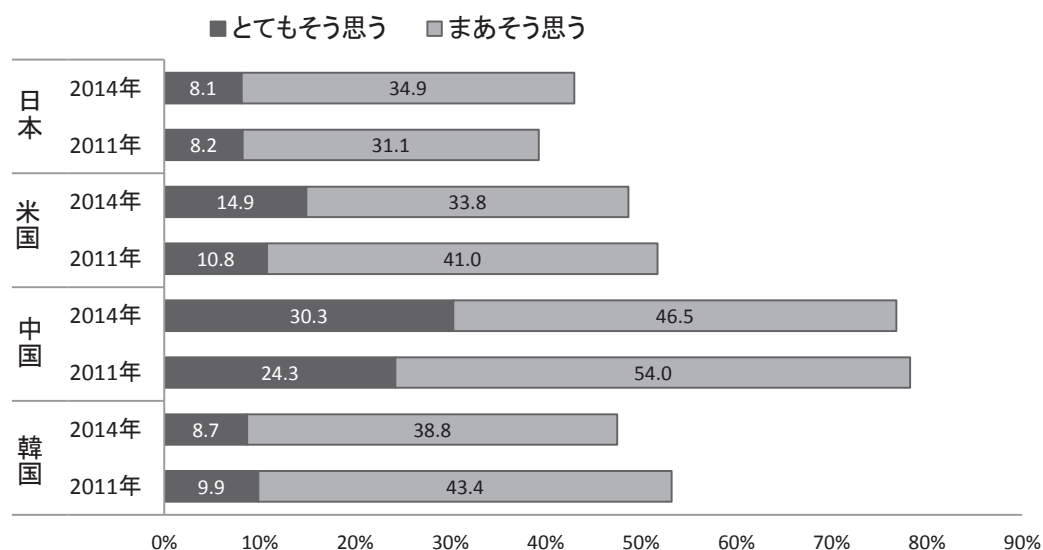


図12-14 国の発展は自分の発展につながっている

5) 成功の要因

日本では、1997年調査で成功の要因について尋ねている。図12-15に示しているように、「努力すること」の割合が1割以上も増加している。一方、「運に恵まれること」「健康であること」「生まれもった才能があること」の割合が減少している。

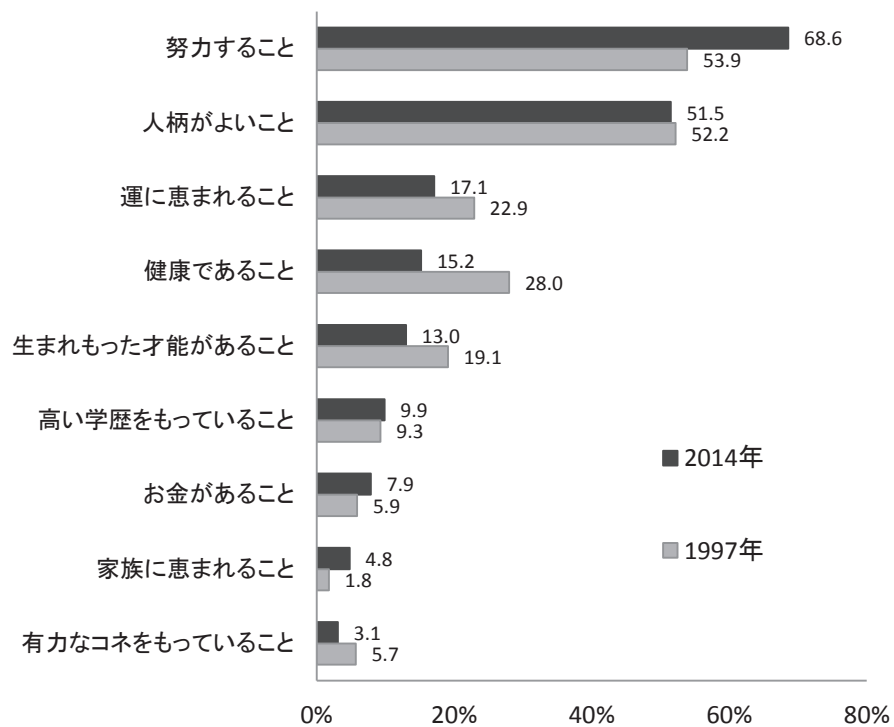


図12-15 社会で成功するために重要なこと(二つまで、日本)

* 1997年：「中学生・高校生の生活と意識に関する調査」

6) 自分について

図12-16は、「自分の希望はいつか叶うと思う」というポジティブな自己評価に対する回答である。「とてもそう思う」だけをみると、今回の調査では、日本、米国、韓国とも4年前より増加しているが、中国はやや減少している。

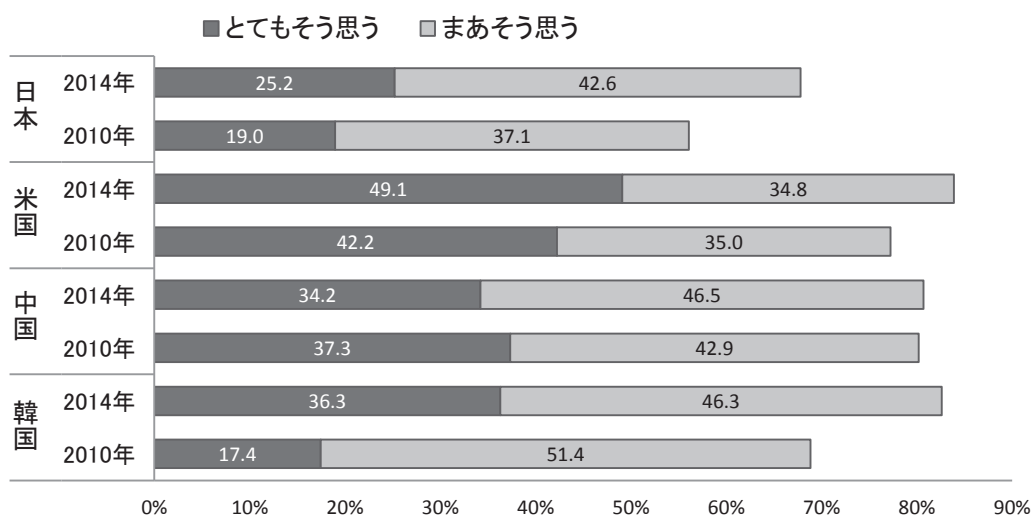


図12-16 自分の希望はいつか叶うと思う

* 2010年：「高校生の心と体の健康に関する調査」

「私は人並みの能力がある」については、日本は、6年前より肯定率がやや伸びている。米国と中国は「とてもそう思う」の割合が減少しているが、韓国は1割強も増加している(図12-17)。

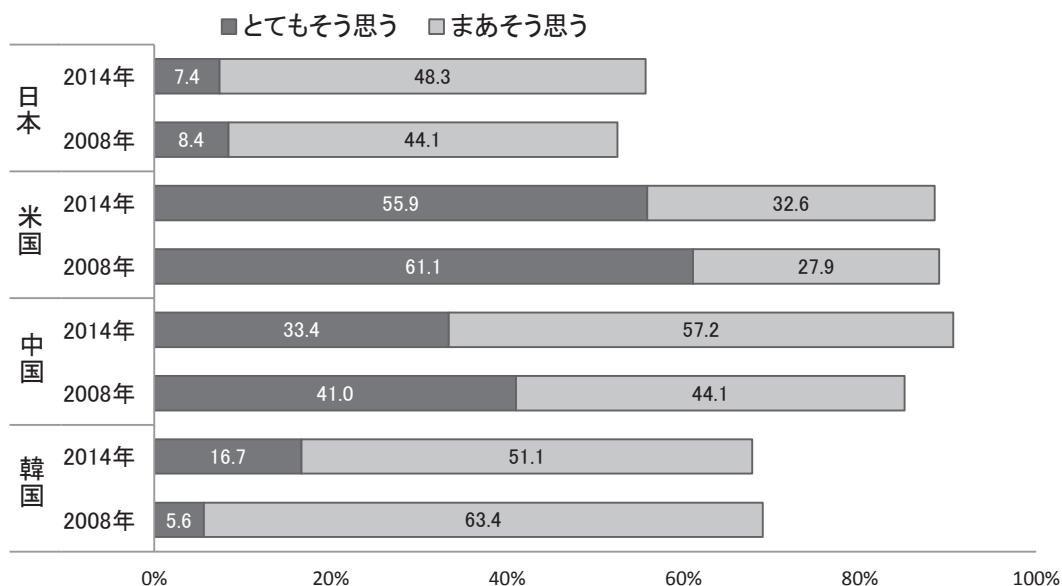


図12-17 私は人並みの能力がある

* 2008年:「中学生・高校生の生活と意識」

「自分はダメな人間だと思うことがある」について、「とてもそう思う」と回答した者の割合は、日本は3年前より1割減少している。米国もやや減少傾向である。中国と韓国は3年前より増加している。特に中国の肯定率(「とてもそう思う」と「まあそう思う」と回答した割合の合計)が、2011年の39.2%から2014年の56.4%と大きく上昇した(図12-18)。

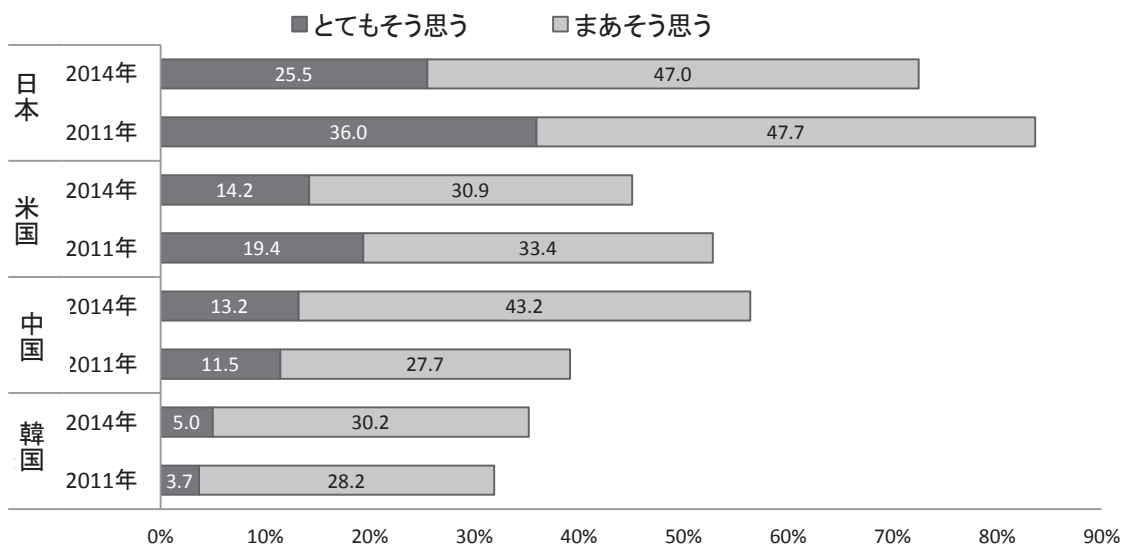


図12-18 自分はダメな人間だと思うことがある

* 2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」

「私は将来に不安を感じている」については、2008年と2011年の調査と比較すると、「とてもそう思う」と回答した者の割合が、日本は減少している。米中韓は2011年が2008年より減少しているが、2014年はいずれも2011年より高くなっている（図12-19）。

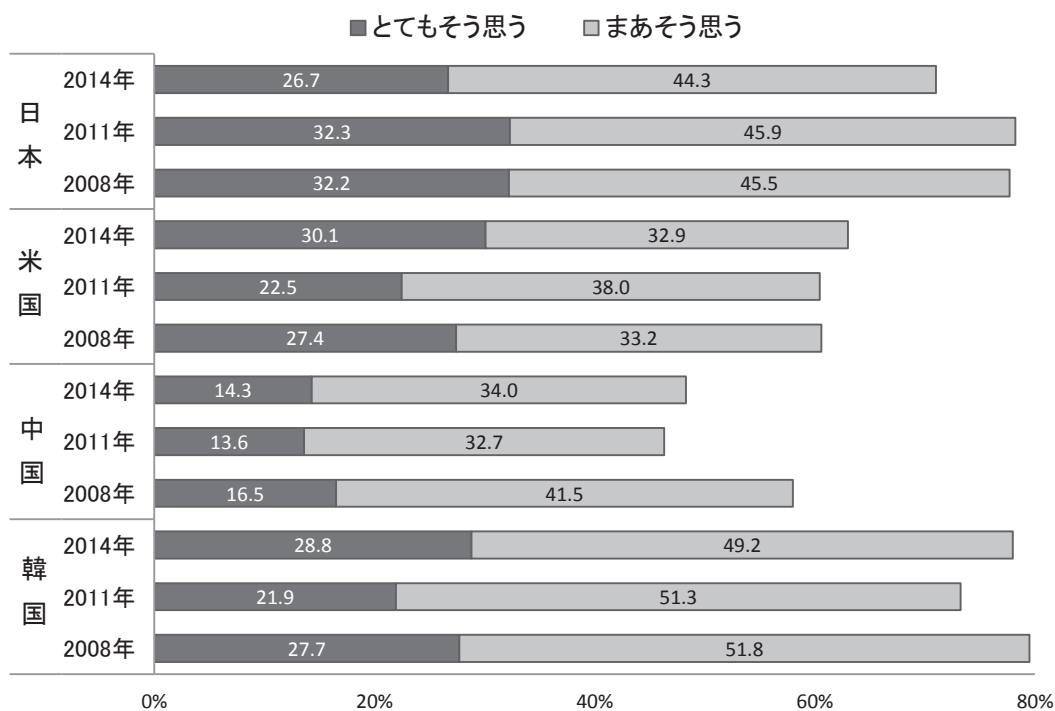


図12-19 私は将来に不安を感じている

* 2008年:「中学生・高校生の生活と意識」、2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」

「周りの人の意見に影響されるほうだ」については、図12-20のとおり、「とてもそう思う」と答えた割合が、日本では今回は6年前より減少しているが、米中韓では逆に高くなっている。

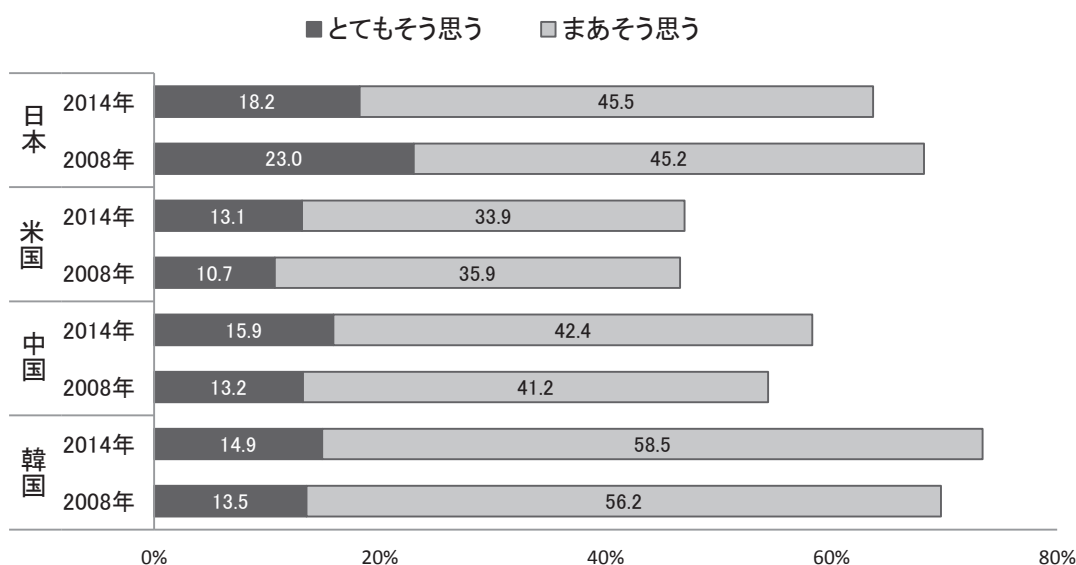


図12-20 周りの人の意見に影響されるほうだ

* 2008年:「中学生・高校生の生活と意識」

「現状を変えようとするよりも、そのまま受け入れるほうがよいと思う」については、「とてもそう思う」と答えた割合が、日本は2008年の14.0%、2011年の11.4%、2014年の6.4%と年々減少している。「まあそう思う」を加えると、日本は2008年と2011年の5割台から今回の3割台へと減少している。また、米国と中国も前回の調査より肯定率が低くなっている。韓国ではあまり変化が見られない（図12-21）。

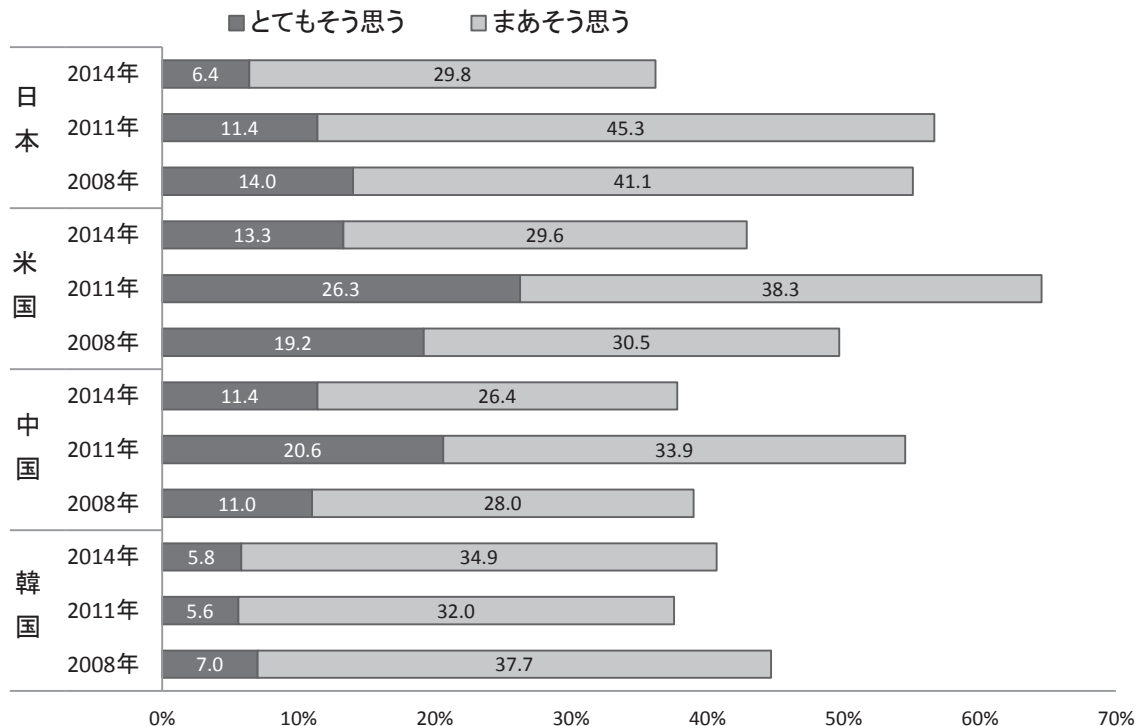


図12-21 現状を変えようとするよりも、そのまま受け入れるほうがよいと思う

* 2008年:「中学生・高校生の生活と意識」、2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」

「あまり勉強しなくても将来が困らない」については、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合が、日本は9年前より減少しているが、米中韓は増加している。特に米国の増加率が顕著である（図12-22）。

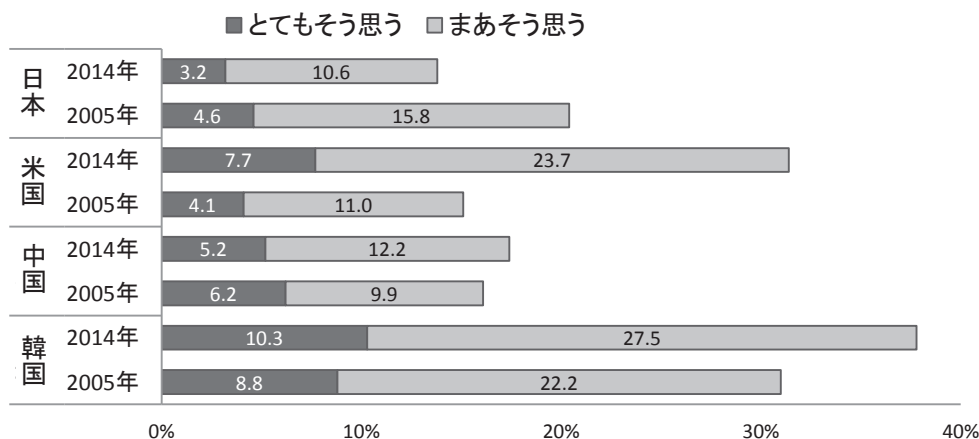


図12-22 あまり勉強しなくても将来が困らない

* 2005年:「高校生の友人関係と生活意識」

このように、過去の調査結果と比較することによって、日本の高校生たちは、自分の価値にやや肯定的になり、将来への不安が少なくなり、自分の意見を持つようになり、また現状の受容より少し変革を求めるようになっている、というような傾向が読み取れる。

7) 生活への満足感

学校生活への満足感について、2005年と2011年の調査と比較してみると、日本の満足感が高くなっている。米国と中国は、2011年に高くなっているが、2014年には両国とも2005年の水準まで減少している。韓国は大きな変化が見られない(図12-23)。

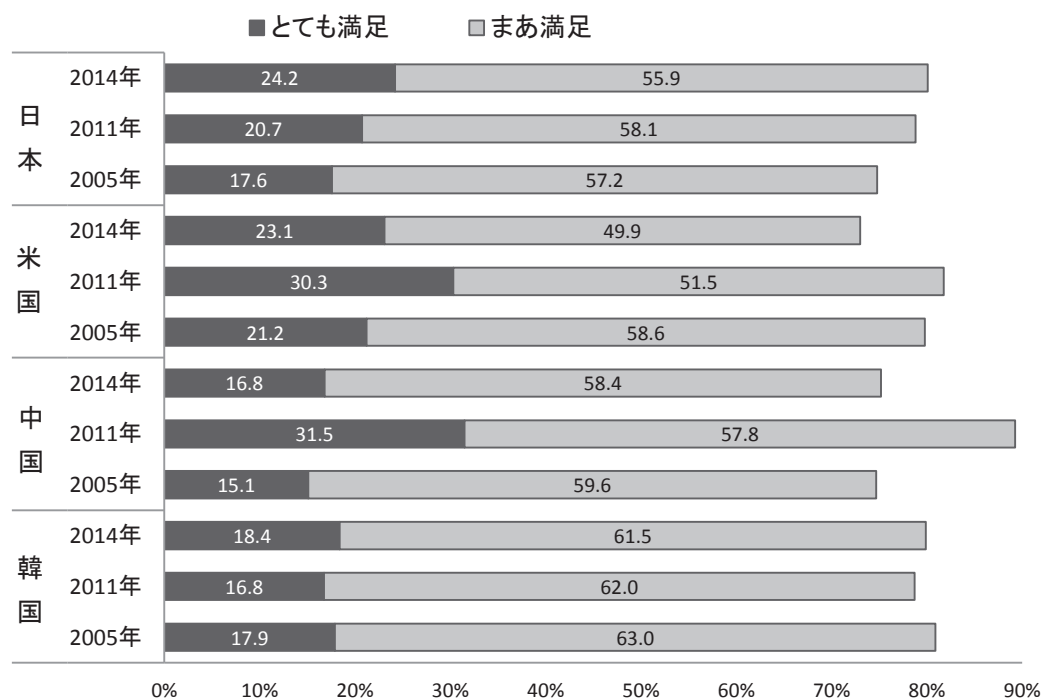


図12-23 学校生活への満足

* 2005年:「高校生の友人関係と生活意識」、2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」

自分自身への満足感を2005年と2011年の調査と比較してみる。日本の高校生は、自分に対する満足感が米中韓より低いが、2005年と2011年調査に比べ、2014年は高くなっている。中国と韓国も同じ傾向であるが、米国は2011年に比べてやや低くなっている(図12-24)。

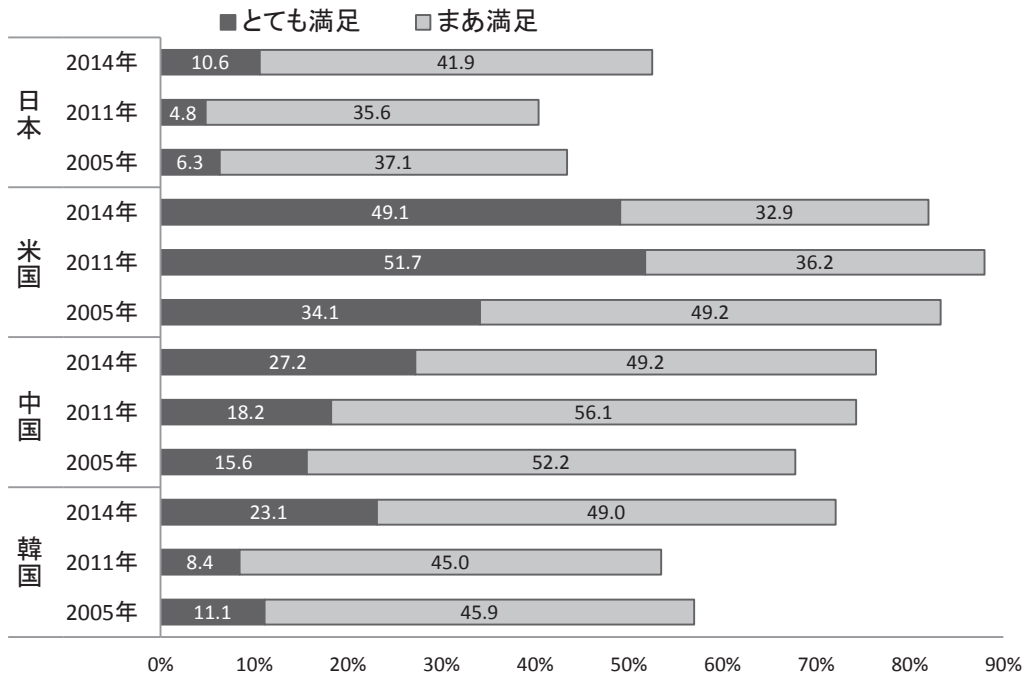


図12-24 自分自身への満足

* 2005年:「高校生の友人関係と生活意識」、2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」

友人関係に対する満足感について、2005年と2011年調査と比較してみると、日本は大きな変化が見られなかった。米国と中国は2011年より「とても満足」の割合が減少しているが、韓国はやや増加している（図12-25）。

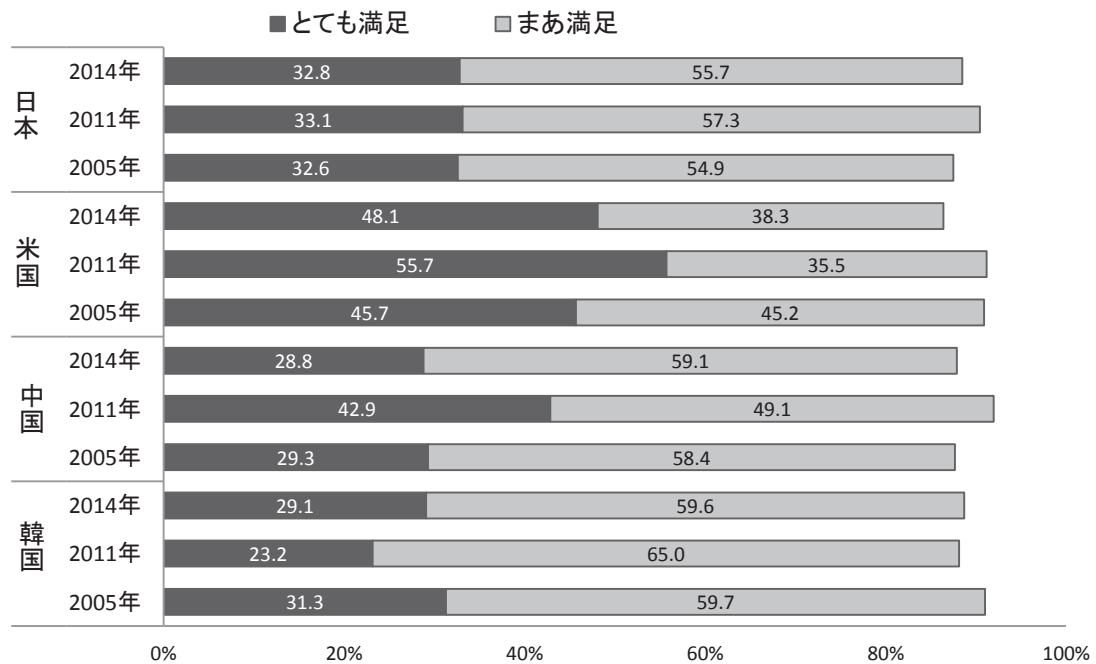


図12-25 友人関係への満足

* 2005年:「高校生の友人関係と生活意識」、2011年:「高校生の生活意識と留学に関する調査」

学業の成績への満足感については、5年前の調査と比較すると、学業の成績への満足感が、日中韓の3か国では高くなっている。米国は、「とても満足」が増えているが、「まあ満足」がやや減少している（図12-26）。

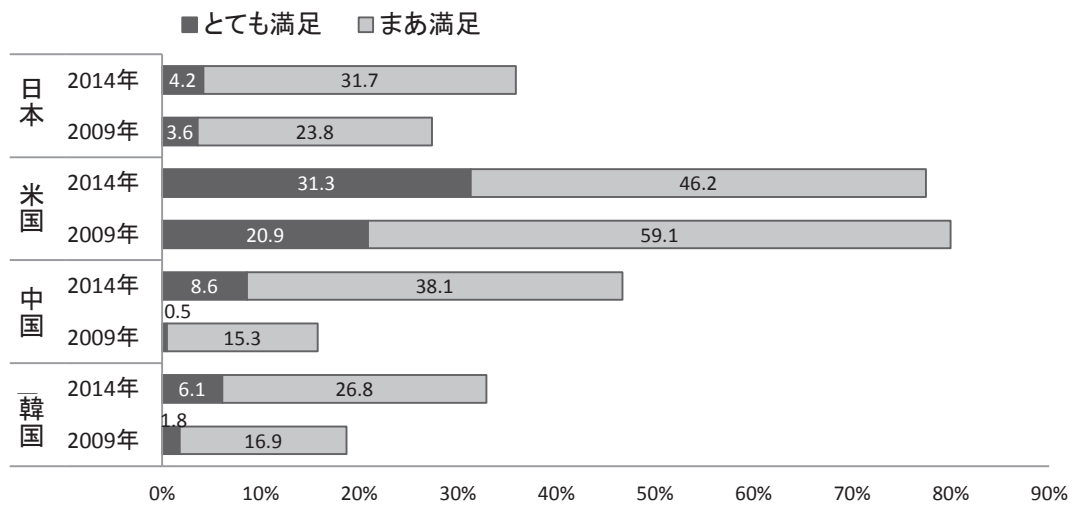


図12-26 学業の成績への満足

* 2009年:「高校生の勉強に関する調査」